

## 紫式部日記 確認テスト（人物批評） 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 こそ（「清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人」の「こそ」）。※強意の係助詞で、結びを已然形にする働きをもつ。

問2 感心しない（よくない・けしからぬ）点。／「けしからず」は本来「異様だ・並々でない」の意で、ここでは和泉式部の素行について「感心できない・好ましくない」という否定的評価を表す。

問3 ヤ行下二段活用・連用形。／「見ゆ」はヤ行下二段活用。直後の補助動詞「侍り」に連なるため連用形となる。

問4 枕草子。

問5 学識に裏打ちされた本格的な歌人とまでは見ていないが、口をついて自然と趣ある歌が出てくる、生まれながらの歌才の持ち主だと見ている。こちらが気おくれするほどの正統派歌人ではない、という評価。

問6 赤染衛門（丹波守＝大江匡衡の北の方）。夫匡衡にちなみ「匡衡衛門」と呼ばれた。

問7 高貴である・格別すぐれている。ここでは「ことにやむごとなきほどならねど」で、身分が特別に高いわけではないが、の意。

問8 得意げな顔つき。いかにも満足し自慢しているような顔つき。「したり顔」＝うまくやると得意になっている顔。

問9 清少納言は得意げに漢字を書き散らしているが、よく見ればその学識にはまだ不十分な点が多い、という批判。知識をひけらかす態度と、その実力の伴わなさを指摘している。

問10 訳：他人と違っていよう（人より勝っていよう）と。／「む」は意志の助動詞。

問11 イ。「うたて」は、いやで情けない・好ましくないさまをいう。

問12 そうあつてはならないのに、浮ついて軽薄な状態。風流におぼれて、本来慎むべき場面でも興にのり、結果として軽々しく浮わつたふるまいに走ってしまう状態をいう。

問13 (1) 打消の助動詞「ず」の連体形「ざる」が撥音便無表記となったもの（「ぎ（る）」）。(2) 係助詞「こそ」は本文中の「まことの歌よみざまにこそ侍らざめれ」にあり、その係り結びの法則によって文末が已然形「めれ」となっている。

問14 「さ」は、直前の「したり顔にいみじう（得意顔で甚だしく振る舞っていた）」さまを指す。訳：あれほど利口ぶって。

問15 (1) 侍らむ（結びの「む」）。(2) 訳：どうしてよいことがあろうか、いや、よいはずがない。

問16 特に高い身分ではないが、たいそう奥ゆかしく由緒ありげで、むやみに歌を詠み散らすことはしないものの、世に知られている歌はちょっとした折のものまで、こちらが恥ずかしくなるほど見事な詠みぶりだという点を評価している。

問17 人と違っていようと風流ぶる人は、必ず見劣りがし、行く末は情けないものになりがちで、何かにつけ興にのって浮ついたふるまいに走り、そうした軽薄になった人の末路がよいはずはない、と述べている。

---

問18 (例) 単にけなすだけでなく、長所と短所の両面を見分けて評する点。和泉式部の歌才や赤染衛門の品位は認めつつ欠点も挙げ、清少納言には自戒も込めて批判するなど、対象を多面的に見る冷静で鋭い批評眼が特徴である。

---

問19 彰子 (藤原彰子)。

---

問20 女流日記文学 (女房文学)。平安時代の宮廷女性による仮名文学の総称。

---

問21 ア・エ。(『源氏物語』と家集『紫式部集』が紫式部の作。イ枕草子は清少納言、ウ和泉式部日記は和泉式部、オ更級日記は菅原孝標女。)

---